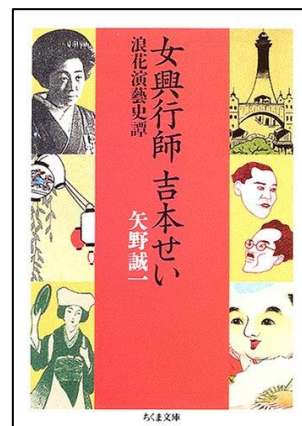


→もうひとつの「わろてんか」—山崎豊子の作家デビュー時代を歩く

2018.1.14(日)カルチャーウォーキング

関西文学散歩第 530 回 参加報告

あわせてサブテクニストの矢野誠一『女興行師吉本せい浪速演藝史譚』を読んでみた—が、評伝だけにあまりにも忠実で、記録として書かれている印象を持った。なおかつ男性ならではの視点であり、成功した女性につきものの「女であることを巧みに自分の仕事に生かした」「女だてらに」などと書かれてしまう。それどころか、男の手を借りている事実があっても自分だけの力で成しとげたように装いを変えて伝えたのではないかと穿った見方さえされている。さらに引用すれば、「どんな事業に成功するよりも、所詮女の幸せは家庭にあることをせいはよく知っていた」とあるが、果たしてそうだろうか？ 事業を發展



させていくその達成感を一度経験したら、もはや家庭の幸せだけでは満足できなくなってしまうのではないだろうか。「女今太閤」「女小林一三」などと並び称された吉本せいは数々のエピソードにことかかない人物で、自分自身をも演出することを忘れなかったし、また巧みであった、ともある。……となると、『わろてんか』の“てん、は実に大らかで、旦那さんの傘の下でしか商売をやれない、到底、大阪での商売には向いていない、成功しないだろうな”と思ってしまう。

ところで、山崎豊子や他の作家によって大阪弁で書かれた小説は、実に趣がある。その複雑な言い回しのニュアンスは、商人の間での駆け引きにより効果を発揮するようだということが、一連の“大阪もの、を読むと感じられるのだ。山崎豊子の“大阪もの、は、ひょっとすると、大阪での商法のバイブル、ハウツー物でもあるのかもしれない。

毎日新聞大阪本社ビルの会場で講師の話を聞いた後、昼食後はいよいよ午後のカルチャーウォークである。四ツ橋近くの山崎豊子の生家「小倉屋山本大阪本店」に向かい、まずは新町遊郭跡へ。その跡地である新町北公園の北西隅には「新町九軒桜堤の跡」の碑があった。この廓、季節には桜の花で染め上げられ、さぞ美しかったことだろう。吉本せいの生誕地は



明石説、大阪天神橋 5 丁目説と明らかではないようだが、『花のれん』では「新町(中通り)の小堅い米屋の娘」となっている。名は多加で、この美しい廓町近くで生まれたという設定だ。嫁いだのは船場の呉服屋、夫は放蕩物で廓遊びや芸人遊びに明け暮れた…と、講師の話や配られたレジュメにあった。その夫が通ったという新町廓の中心部から東へ行くと、東側の通路だったという「新町橋



跡」のコンクリート製だろうか、擬宝珠を冠った欄干が記念碑的に残され、明治期に鉄製のアーチ橋に架け替えられた」と説明版に書かれている。そして、そのすぐ東側が山崎さんの生家という「小倉屋山本大阪本店」、多加が生まれた新町中通りと程近い距離である。だが、日曜とあってお店はお休みで、店内の「山崎豊子コーナー」は見られず残念だった。改めて平日に、必ず訪れてみたいと思う。

<報告：田原由美子>